

人類と感染症との闘い

—「得体の知れないものへの怯え」から「知れて安心」へ— (続)

第11回「余話—日本の出来事を中心に」

かとうしげたか
加藤茂孝
Shigetaka KATOW

本シリーズは、2009年9月から正編が、そして、2013年12月から続編が始まり今回が最終回である。この10年間で新たに判明したこと、および追加事項を日本の出来事を中心とした感染症史余話の形で補足章とする。

I. 天然痘

1. 痘瘡(とうそう) 稲荷

天然痘はその致死率の高さと、治ってもあばたや失明などが残ることで大変恐れられた。種痘が普及し予防出来るようになるまでは、人々は神様仏様に祈る以外に方法が無かった。

東京に残る有名な痘瘡稲荷は、太田姫稲荷である(千代田区神田駿河台1-2。図1)。室町時代中期に太田道灌の娘が天然痘で重篤になり、京都の一口稲荷神社(いもあらいいなり: 現、豊吉(ほうよし)稲荷。久世郡久御山(くみやま)町)が天然痘に靈験があると聞き、そこに娘の回復を祈願したところ、治癒したという。道灌は長祿元年(1457年)に一口稲荷神社を江戸城内に勧請し、後に城内の鬼門に祀った。その後、徳川家康は慶長11年(1606年)に

城外鬼門に当る聖橋南詰の東側に遷した。明治5年(1872年)太田姫稲荷神社(名は太田姫命ゆらい)と改称。昭和6年(1931年)に、国鉄(現、JR東日本)総武線拡幅により現在地に遷座した。

いもあらいとはイモ(疱瘡の痘)を洗い去ると言われた事から呼ばれた。地理的には巨椋池(おぐらいけ)に三方を囲まれ、入口がわずか一か所しかないという事で一口という漢字が当てられた。「山城名勝志」(大島武好編、宝永2年(1705年))に「一口古老云昔三方ハ沼ニテ一方ヨリ入口有之故二一口ト書ト云リ」とある。効能と地形とを結び付けた難読名である。

埼玉鉄道高速線川口元郷駅の近く(川口市元郷1丁目)で、痘瘡稲荷を見つけた(図2)。扁額は瘡守



(加藤茂孝)

図1 太田姫稲荷神社



(加藤茂孝)

図2 瘡守稲荷大明神 川口市

(かさもり)と読み、この名の神社は、現在でも全国に残って居る。

また、流鏝馬(やぶさめ)で有名な穴八幡神社(東京都新宿区西早稲田二丁目)は8代将軍、徳川吉宗の世嗣(9代将軍家重)の痘瘡平癒祈願に行われたのがその最初である。

2. 小山肆成(しせい)：独自に種痘法開発

小山肆成(1807～1862年)は、号を蓬洲(ほうしゅう)といい、紀州(和歌山県と三重県南部)の医学界では「北の(華岡)青洲、南の蓬洲」と高く評価されている。天保9～13年(1838～1842年)に発生した熊野地方の天然痘に驚き、その予防を志し、牛を実験動物にまた妻を種痘の被験者として天然痘の予防ワクチンの研究を行った。

嘉永2年(1849年)には、牛化人痘苗(ぎゅうかじんとうびょう)の開発に成功したと言われている。これは人の天然痘を牛に接種してできた痘を痘苗、すなわちワクチンとしたものである。しかし、ことによると、この痘苗は牛痘かパラポックスウイルスに属する偽牛痘ウイルスの可能性もあり得る。彼は独力で研究を行ったが、妻と養女が亡くなり家系が絶え、記録が散逸して彼の業績が忘れられているのが残念である。

3. 天然痘の小説

天然痘や種痘については、多くの小説が書かれている。精力的に取り組んだのは吉村昭で、「雪の花」(1988年、新潮文庫)(福井藩へ痘苗を届け種痘を広めた笠原良策)、「北天の星」(1980年、講談社文庫)(ロシアから種痘を伝えた中川五郎治)、「花渡る海」(1985年、中央公論社)(シベリアから痘苗を持ち帰った川尻浦久蔵)、「種痘伝来記」(「歴史の影絵」所載、2003年、文春文庫)(中川五郎治と川尻浦久蔵)などを書いている。澤田瞳子が「火定(かじょう)」(2017年、PHP研究所)を書き、737年平城京をパニックに陥れた天然痘流行時の医師達の活躍を描いている。この年流行した天然痘は、麻疹の可能性が残る^{*1}。

II. ハンセン病

1. 江戸時代の遺体から病原体 DNA を検出

木更津市の俵ヶ谷遺跡と茅ヶ崎市の臼久保遺跡の鍋かぶり葬(死者の頭にすり鉢や鍋をヘルメットのようにかぶせて葬る)をされた江戸時代の2体の人骨に病変痕跡があった。鼻腔などの病変部位からハンセン病菌のDNAが検出された^{*2}。

2. 後藤昌直：小笠原登の先駆者

漢方による優れた治療を行った医師として小笠原登が知られているが、その先駆者に後藤昌直がいた。安政4年(1857年)美濃国北方(現、岐阜県本巣郡北方町)生まれ。

明治8年(1875年)、ハンセン病医療の第一人者で漢方医であった父の昌文と共に、当時、東京市神田猿樂町にハンセン病の専門病院「起廢病院」を開院した。主に隔離政策が行われていたハンセン病を外来・通院治療により治癒させた。「後藤の治療は大風子油・七葉樹皮・甘草の丸薬の服用、食事・運動療法であった」^{*3}

昌直は著書の「難病自療」において、ハンセン病は感染症であると解説している。「第二 1907年「癩予防ニ関スル件」」^{*4}に記されている「難病自療」の解説によれば、「ハンセン病観を要約すると、ハンセン病の発症には遺伝・自発・感染の三つの場合があるが、遺伝の場合は少なく、発症には生活環境と個々人の「性質」が影響するということになる。すでに、起廢病院においては、感染症という理解が成立していたことになる。ハンセン病の専門病院として内外から高く評価されていた起廢病院では、経験的にハンセン病を感染症とみなす認識が成立していた」^{*4}としているが、これは極めて先駆的、開明的な主張であった。

各地で講演を行い患者に対して治る病気であることを啓発し、全国の門下生を指導し各地に治療院を開設した。貧しい患者には無料で治療を行った。こ

*1 野崎千佳子：天平七年・九年に流行した疫病に関する一考察。法政史学 53：35-49(2000)。

*2 鈴木幸一ほか：鍋被り葬人骨からのらい菌DNAの証明。Jpn J Lepr. 81(1/2)：45(2012)。

*3 湯地晃一郎：ハンセン病に立ち向かった2人—ダミアン神父と後藤昌直医師—。

日本・ベルギー協会機関誌ニュースレター 17。記事4。2014年2月25日。
http://www.idea-jp.org/newsletter/newsletter_17_4.html(引用2019/1/15)

*4 第二 1907年「癩予防ニ関スル件」。

<https://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/kenkou/hansen/kanren/dl/4a7.pdf>(引用2019/1/15)

の療法と感染症説、および患者への寄り添い方の3点全てにおいて小笠原登の先駆者であった。小笠原登が活躍した時期は、男子は健康な兵士でなくてはならないという強兵志向がより強くなった昭和期だったので、その逆風を受けて昌直よりも孤立させられたものと考えられる。

1885年末、ハワイ王に招かれ、ハワイでハンセン病患者の治療を行った際、ダミアン神父の治療も行い、彼のハンセン病は一時軽快した(本誌第60巻(2014)11号、(続)3回「ハンセン病」参照)。だが、ハワイ衛生局との不和により、1887年9月にはダミアン神父の治療は中断された。その後に昌直はハワイからCooper Medical College(現、スタンフォード大学医学部)に留学し、卒業論文を提出して帰国した。その後もハワイや日本で治療に当り、明治41年(1908年)死去^{*3}。

3. 北條民雄の本名

「いのちの初夜」で有名なハンセン病作家北條民雄の本名が明らかにされた。七條晃司(しちじょう・てるじ)と言い出身地(徳島県阿南市下大野町)である阿南市が親族を20年間説得し続け、生誕100年にあたる2014年6月に了解が得られて、没後77年にして本名が公開された^{*5}。親族は「本名が出ることで勇気づけられる人がほかにもいると思う。時代と社会に消されてしまった存在を取り戻すようで、うれしい。北條の『條』は、七條家の一員でいたいという気持ちの表れだろう^{*5}と語っている。

2016年の朝日新聞の調査によれば、国立ハンセン病療養所の入所者で、現在も仮名である人が全入所者の38%に上ることがわかった。1996年らい予防法が廃止された後でさえも、今なお家族や故郷から分断され、尊厳の回復は難しい状況にあることがうかがえる^{*6}。

4. 崔南龍と金相権(佐川修)：二重の差別

在日韓国人二世の崔南龍(1931～2017年)の著作

「一枚の切符：あるハンセン病者の命の綴り方」(みすず書房、2017年)が出版された。1941年ハンセン病を発症し国立療養所邑久光明園入所、2013年失明。ハンセン病の人々を「浄化」の対象として「狩りこみ」貨車で施設に送り、戦後もなお隔離を続けた歴史に触れている。

金相権(1931年?～2018年、日本名:佐川修)は、朝鮮半島出身で、1945年3月、ハンセン病と診断され栗生楽泉園に入所した。そこで食事を重監房へ運ぶ係であったので、2014年「重監房資料館」建設の時には、数少ない証人として復元に協力した^{*7}。後に、多摩全生園に移り、ハンセン病からは既に回復していたが、2006～2017年全生園入所者自治会長を務め、ハンセン病資料館の建設を推進した。彼は全生園の近くに自宅を持つ宮崎駿と話す機会があり、宮崎監督の映画「もののけ姫」(1997年)にハンセン病患者のイメージが登場するきっかけになった^{*8}。

崔南龍と金相権の二人は、ハンセン病と在日コリアンの二重の差別の中を生きた。

5. 特別法廷：法的差別

1948年から1977年にかけて裁判所は、ハンセン病患者の裁判のうちの95件を、隔離した療養所等において「特別法廷」として開いた^{*9}。1953年に熊本地裁で死刑が言い渡され執行された「菊池事件」が代表例である。熊本地裁判決(2001年)が隔離政策は不要だったと認めた1960年以降も、27件開かれていた。2016年4月25日、最高裁判所は、定型的な運用で特別法廷が開かれ、『偏見、差別を助長し、人格と尊厳を傷つけたことを深く反省し、おわび申し上げる』と謝罪した^{*9}。

この特別法廷については、「ハンセン病を理由とした設置申請はほぼ全て許可されたが、結核などハンセン病以外のケースは1948～1990年に61件中9件しか認められていない。」^{*10}。このことから同じ特別法廷でもハンセン病への偏りが極めて大きかったことが分かる。

*5 ハンセン病作家の本名を公表 遺族「存在を取り戻すよう」朝日新聞デジタル記事、2014年8月9日。

<https://blog.goo.ne.jp/kokakuyuzo/e/da5cdfc262ff102663b6c88cfa1c9149>(引用2019/1/15)

*6 高木智子：記者有論：ハンセン病 笑顔のために、何が出来る 朝日新聞2016年5月12日。

*7 重監房、最後の生き証人 栗生楽泉園 終戦前後に入所・元患者の佐川さん死去。東京新聞 群馬2018年1月26日。

<http://www.tokyo-np.co.jp/article/gunma/list/201801/CK2018012602000183.html>

*8 宮崎駿:おろそかに生きてはいけないーハンセン病元患者から学んだこと。2016年2月9日。

<https://www.nippon.com/ja/features/c00723/>

*9 ハンセン病 特別法廷 最高裁謝罪 口頭で「違憲の疑い」。毎日新聞 2016年4月25日。

<https://mainichi.jp/articles/20160425/k00/00e/040/213000c>(引用2019/1/15)

*10 「特別法廷」最高裁が謝罪へハンセン病、手続き不適切。日本経済新聞2016年4月1日。

<https://www.nikkei.com/article/DGXLZO99132080R00C16A400000/>(引用2019/1/15)

6. 映画と小説

映画「あん」は、小説「あん」(ドリアン助川, 2013年 ポプラ社)を映画化(河瀬直美監督, 2015年)したものである。粒あんの作り方に熟練している元患者女性と若者との交流を描き、らい予防法廃止後、元患者が社会に受け入れられて行く過程と若者の自立がテーマになっている。

また、ドキュメンタリー映画「罨(こだま)雄二 ハンセン病とともに生きる～熊笹の尾根の生涯」(2017年、岩波映像制作)がある。罨雄二の詩文集「死ぬふりだけでやめとけや」(みすず書房、姜信子(きょうのぶこ)編集)に基づく。

遠藤周作「わたしが・棄てた・女」1963年(文芸春秋新社、後、講談社文庫)は、ハンセン病と診断され病院生活を送っていた女性が、それが誤診であることが分かり退院した。しかし、院内で見た悲惨な患者達に寄り添おうと看護師になり病院に戻る話である。井深八重(1897～1989年)の実話を基にしている。これは、国立療養所ではなくフランスのカトリック系のジェルマン・レジェ・テストウィード(Germain Leger Testvuide)神父が1889年に建てた私立の療養所、神山復生病院(御殿場市)が舞台であった。ここでは、患者の外出や住民の来訪などがあり、病院は外部に対して開かれ、隔離中心の国立療養所との大きな違いがあった。現在は、ハンセン病への理解と患者の歴史を残すために復生記念館が建てられている。

Ⅲ. ペスト

1. 家屋焼却

家屋焼き払いによるペスト対策については、英国が当時は植民地であったインドで行っているが、日本では北里柴三郎が提案している。明治35年(1902年)9月29日、横浜市海岸通でのペスト患者の初発に当り、患家に保菌ネズミも確認されたので、県および市当局は早期に局所での根絶を目指して、196戸1,256名居住の地域を10月30日から11日間かけて焼却した。強制ではなく、交渉の結果、当局が住宅を買収(1戸当たり168円)するという補償を

行っている^{*11}。しかし、残念ながら局所で防止するという効果はなかったようであった^{*12}。百数十年前には、まだこのような初歩的・原始的な対策が採られていた。

2. ニュートンの3大発見とペスト

ニュートン(Isaac Newton、グレゴリオ暦1642～1727年)の有名な3大発見(万有引力、微分積分学、光のスペクトル分光)は、1665年から1666年にかけてペストによって2度、ケンブリッジ大学トリニティカレッジが閉鎖されて、やむなく自身の田舎である東海岸リンカーンシャーのウールズソープWoolsthorpe-by-Colsterworthに帰っていた18か月の事である。1665年のペスト流行では、「ロンドン市民46万人の内、その2/3が首都から避難したが、それでも6万8,596人が死亡した」^{*13}。1666年の流行では、「9月2日のロンドン大火でペスト菌を運ぶノミが寄生するネズミが生息する老朽家屋が数千軒焼失したにもかかわらず、それでもロンドン市民2,000名が死亡した。この流行がロンドン最後のペストの大流行であった」^{*13}。

彼は流行の直前の1664年に奨学生試験に受かって奨学金を得られ、さらに1665年には学位を得ていたことも幸いであった。田舎ではカレッジの雑事から完全に解放されて、カレッジで着想を得ていた上記の3理論に対する思索に集中できた。これは彼の22～23歳の頃のことである。大袈裟に言えばペストのお陰で、3大発見が完成したと言っても良い出来事であった。

Ⅳ. コレラ

1. 巡査の殉職

コレラの対策に当たり、自らも感染死亡した巡査は、愛知県以外にもいることが分かった(本誌第62巻(2016)6号、(続)7回「コレラ」参照)。佐賀県唐津市肥前町田野高串に増田神社がある。明治28年7月、コレラが高串で発生し、真性40人、疑似34人、死者9人を出した。このコレラ防疫に派遣されたのが増田敬太郎巡査であった。同年7月17日に佐賀県巡査を拝命し、直ちに高串のコレラ

*11 関根房雄「19世紀末以降のアジア貿易の展開とペストの日本襲来」明治大学大学院商学研究科「商学研究論集」39号p263-280,(2013).

*12 滝上正:「ペスト残影」神奈川新聞社、p71(2002)

*13 J.トレーガー、鈴木主税訳:「トビックス&エピソード世界史大年表」、平凡社、p198(1985).

防疫を担当した。防疫、患者の手当、死体処理を3昼夜不眠不休で行ったという。7月23日自らも感染し、24日死亡。満26歳。住民の尊崇篤く死後神社が設立された*14。

さらに、横浜市西区にある久保山墓地にも、明治時代に殉職した県警の巡査8人の墓があることが明らかになった。そのうち5人は、明治前期のコレラ流行時にコレラの消毒作業を担当して、自身も感染して殉職した*15。

このような殉職例は、上記3県だけではなく、おそらく全国で起きていたのではないと思われる。

2. ジョン・スノウの疫学調査

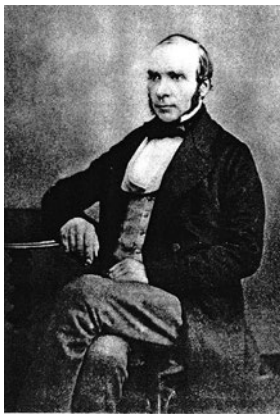
疫学の創始者ジョン・スノウ John Snow (1813～1858年)のコレラ調査活動を少年向けに書いた本デボラ・ホプキンソン「ブロード街の12日間」(千葉茂樹訳、あすなろ書房)が、2014年に出版されている。スノウの肖像、復元されたポンプ、スノウが調査して作成したコレラ患者の分布図を示す(図3)*16。図中の黒点はコレラによる死者であり、その分布がわかる。スノウはコレラの原因がブロード街(Broad street、現在はBroadwick street)の中央にある手押しポンプ(Pump)であると判断し、手押しポンプの

レバーを取り外すと、コレラは終息した。「後年の調査によると、肥料の汚水溜に1854年8月末の最初の患者(40 Broad Street)の糞便が混入したこと、汚水溜めと問題のポンプとが90cmしか離れていなかったことが分かっている」*17。

V. 結核

1. 高田畊安(こうあん)とサナトリウム建設

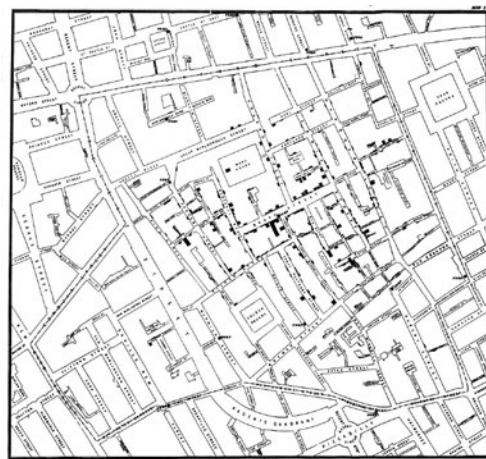
結核に対する有効な薬が無かった時代の唯一の治療法は、サナトリウム療法と呼ばれる、高原や海浜などの日当たりが良く、空気がきれいな場所で十分な栄養を摂り、安静にすることであった(本誌第55巻(2009年)12号、第3回「結核」参照)。欧米からもたらされたこの治療の考えに基づき、「明治20年(1887年)7月、日本初のサナトリウムとして鎌倉の由比ヶ浜に建てられたのが結核療養所「鎌倉海浜院」であった。その後、湘南地方には明治25年に鎌倉養生院、明治30年に杏雲堂平塚分院、明治32年に中村恵風園療養所と南湖院が次々と開設され、最も多い時代には12のサナトリウムが湘南地方にあった」*18。中でも最大のもは南湖院(なんこい



1. ジョン・スノウの肖像画



2. ポンプ(加藤茂孝)



3. 患者分布図

図3

(1., 3. は“The John Snow Archive and Research Companion”提供)

*14 警神・増田敬太郎. 西野神社社務日誌. 2008年10月16日.
<http://d.hatena.ne.jp/nisinojinnja/20081016>

*15 明治期に殉職、8巡査の墓. 読売新聞 神奈川2016年11月12日.

*16 (1) ジョン・スノウの肖像画.

http://johnsnow.matrix.msu.edu/images/online_companion/snow_figure_full.jpg(引用2019/1/15)

(2) ポンプ: 加藤茂孝2018年9月撮影.

(3) 患者分布図: http://matrix.msu.edu/~johnsnow/images/online_companion/chapter_images/fig12-5.jpg(引用2019/1/15)

*17 疫学、ブロード・ストリートの事件

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%96%AB%E5%AD%A6>(引用2019/1/15)

*18 島尾忠男、竹下隆夫: 結核に縁(ゆかり)の地歴訪〜 第5回 湘南地方サナトリウム旧跡訪問. 1/ 2011 複十字 No.337 26-28.

ん)で南湖(なんご)(茅ヶ崎市南湖6丁目)に存在し、東洋一のサナトリウムと称された。南湖院は1945年の海軍接収による解散まで、最盛期の昭和10年代には約5万坪に及ぶ広大な敷地を持ち、医王祭(クリスマス)で住民を招くなどなど、茅ヶ崎の街の発展に大きく寄与した。その創設者が高田畊安(こうあん。畊は耕の古字、1861～1945年)である*¹⁹。東大卒で母校でベルツの助手をしていた高田は、自らが肺結核になり東大を辞職。完治後の1896年東京神田に東洋内科医院を、そして1899年に南湖院を開いた。高田はクリスチャンであり、南湖院で患者に医王(イエス)の事を説き、そのため昭和20年には、不敬罪で藤沢署に出頭させられているが、逮捕はされていない。南湖院は、1946～1956年米軍に接収された。現在、跡地は、茅ヶ崎西浜高校、西浜中学校、太陽の郷になっている。2015年には中核施設であった第1病棟が茅ヶ崎市に寄付されて文化遺産としての使用が2018年に決まった。かつてここには、勝海舟夫人たみ、国木田独歩、坪田譲治、中里介山、徳富蘇峰、八木重吉、萬鉄五郎らが入院していた。

VI. 梅毒

1. 梅毒患者増加

梅毒患者数は近年増加が問題になっているが、国立感染症研究所の集計によると2018年の梅毒患者数は6,923人になった。東京都が1,759人、大阪府1,186人、愛知県447人、神奈川県350人など都市部で目立つ*²⁰。2019年は14週現在で既に1,627例に達している*²¹。梅毒は近年、特に20代の女性で増えており、妊娠前や妊娠中に感染した母親の胎盤を通じて、胎児が感染して「先天梅毒」になり、生まれた胎児が死亡することもある。

2. 先天梅毒

先天梅毒については、日本産科婦人科学会の2017

年7月4日までのまとめによると、2011～2015年の5年間で、21人の出生児が母子感染を原因とした「先天梅毒」と診断された。このうち5人が死亡、4人に後遺症があった。全国257病院の産婦人科を調査し、妊婦166人の感染者がいたが、その4分の1は定期的に健診を受けておらず、胎盤を通じて胎児に感染した可能性があると考えられている*²²。

VII. ジフテリア予防接種禍事件

世界の三大予防接種禍事件(本誌第56巻(2010)3号、「ポリオ」参照)の中でも、最多の被害者を出した「ジフテリア事件」は、京都市で1948年に68人、鳥取県で16人、合計で乳幼児84人が死亡した「ジフテリア予防接種禍事件」である。この事件は、戦後間もない1948年の予防接種法の成立と、法による予防接種の義務化直後に発生した。1948年10月11日に京都市でジフテリアの予防ワクチンとして10万人に無毒化(不活化)したジフテリアトキソイドが接種され、その内606人に発熱麻痺が出現し、死亡者以外の538人に後遺症が残った。その後の調査で、特定の日に製造された特定ロットにのみ被害が出ていたことが判明した。鳥根県でも京都市と同じ特定ロットでのみ248人の被害が出た(内、死亡16人)*²³。

これは、ジフテリアトキソイドの無毒化の過程で起きた事件であった。本来、ロットは1つの缶で培養されていたものを1つのロットと指定する事になっている。ところが大阪日赤医薬学研究所の工場で、4つの別々の独立した缶の培養を、同一行程で同じ日に製造されていたことから、それを1つのロットとして扱っていた。4つの缶少なくとも2つの缶で無毒化に使用したホルマリンを入れなかったか、あるいは量が不足していたことが原因であった。国家検定を行ったのは1947年に設立された国立予防衛生研究所であったが、特定部分(たまたま十分に無毒化されていた缶)の抜き取り試料で試験が行われており、広く抜き取るランダム抜き取りでは

*19 大島英夫「南湖院 高田畊安と湘南のサナトリウム」茅ヶ崎市史ブックレット5.茅ヶ崎市.p1-47、(2003)。

*20 国立感染症研究所：感染症発生動向調査(2019年1月21日現在)(26ページ)。
<https://www0.nih.go.jp/niid/idsc/idwr/IDWR2018/idwr2018-52.pdf>

*21 国立感染症研究所：感染症発生動向調査(2019年4月19日現在)。
<https://www0.nih.go.jp/niid/idsc/idwr/IDWR2019/idwr2019-14.pdf>

*22 梅毒で赤ちゃん5人死亡 未検診、胎内感染の要因に。日本経済新聞、2017年7月5日。
<https://www.nikkei.com/article/DGXLZO18483070U7A700C1CR8000/>

*23 土井 脩：薬事温故知新「ジフテリア予防接種禍事件」医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス. 47(4): 284-285(2016)。
https://www.pmrj.jp/publications/02/pmdrs_column/pmdrs_column_76-47_04.pdf

無かったことから、不適切な製品を見抜けなくて検定は合格していた。つまり、製造工程の中でのロット概念と検定方法の両方にミスがあり、それが重なったのが原因であった*23。「製造元の所長が禁固2年の執行猶予付き判決で、検査技官は無罪」*24。全国薬害被害者団体連絡協議会の世話人は「薬害被害はその後も繰り返されてきた。それは真相究明、被害者の救済、検証、その全てがずさんだからだ。そもそも真相が明らかにされることこそが被害救済の前提だ」と語っている*24。それ以降、これを極めて深刻な反省材料として、ロット概念の確立と検定方法の見直しが行われた。

この時の和解で、京都市の遺族らが国に和解を強いられていたことを示す資料が、被害者グループの調査で京都市の公文書の中から見つかった*24。発見された文書は、正式な和解文書がなかった京都市の要請で、70年代に遺族会の代表が発生当初から和解に至る経緯を振り返ったものであった。戦後の混乱した米軍の占領下の状況と、戦前の国家意識がまだ色濃く残る中での事件の悲しい終結であった。

現在では、予防接種法に基づく予防接種によって健康被害が生じた場合には、健康被害と接種との関連性を厚生労働大臣が認定した時には、市町村や区

による給付がある*25。また、任意予防接種で健康被害が生じた場合には、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく補償がある*26。

VIII. デング熱の国内流行

2014年に、首都圏を中心に162例のデング熱(dengue fever)の国内感染例が報告され、国民を大変驚かせた(図4)*27。それは、国内流行は太平洋戦争中の九州・沖縄での小流行以来のことで、約70年ぶりであったからである。戦後は、海外旅行をしてそこで感染し、帰国後に発症する輸入感染例があり、年々増加傾向にある。

デングウイルス(dengue virus)は、フラビウイルス科(Flaviviridae)に属し、ネッタイシマカ(*Aedes aegypti*)やヒトスジシマカ(*Aedes albopictus*)により、人→蚊→人→蚊の感染環を作っている。1～4型の4つの血清型があり、近年では1型のウイルスが最も多く検出されている。2014年の国内流行も1型であった。

2014年は東南アジアなど海外で感染して帰国した人が、樹木や溜水の多い蚊の生息しやすい公園などで血をヒトスジシマカに吸われて、その蚊が他の

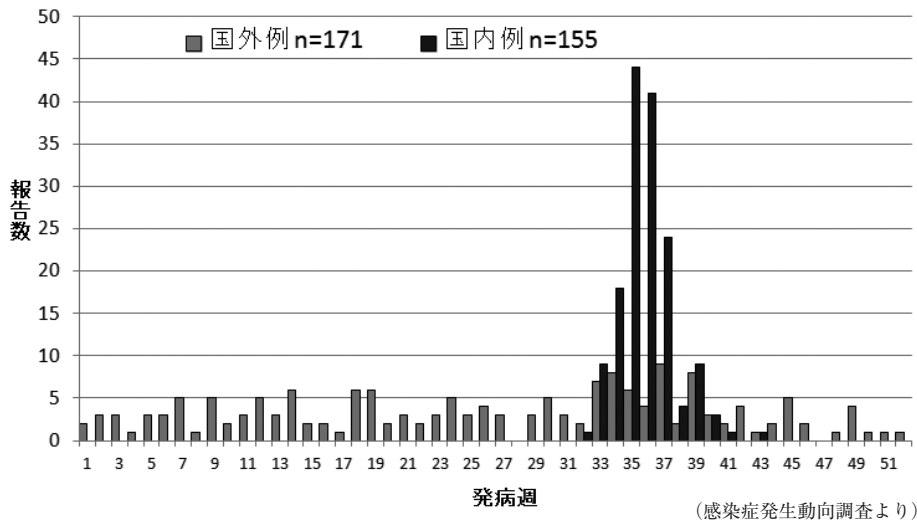


図4 デング熱の感染地別診断週別報告数(2014年第1～52週、n=326*)

*2014年第1～52週に診断され報告された340例の発症日に基づく。
発症日不明の計14例を除いた

*24 京都・島根ジフテリア予防接種禍 ワクチンずさん乳幼児84人死亡. 京都新聞. 2017年4月25日

*25 厚生労働省:健康被害救済制度.

https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou20/kenkouhigai_kyusai/

*26 独立行政法人PMDA:医薬品副作用被害救済制度.

http://www.pmda.go.jp/kenkouhigai_camp/index.html

*27 国立感染症研究所: <https://www.niid.go.jp/niid/images/iasr/rapid/graph/Vol.36/graph/pf42111.gif>

人を刺して流行したと考えられている。人が多く集まる代々木公園などでの感染が多かった。この時は東京都が中心となり、公園内立ち入り禁止や蚊の駆除対策を集中的に行って、幸いこの1年のみで、国内流行は終息した。

国立感染症研究所によれば、2014～2017年の輸入例は、2014年179例、2015年292例、2016年343

例、2017年245例、2018年201例、であった*²⁸。

謝 辞

貴重なコメントを戴きました、山内一也氏に感謝します。(文中、敬称を略させていただきました)

*28 国立感染症研究所：日本の輸入デング熱症例の動向について。
https://www.niid.go.jp/niid/images/epi/dengue/PDF/dengue_imported201904.pdf